

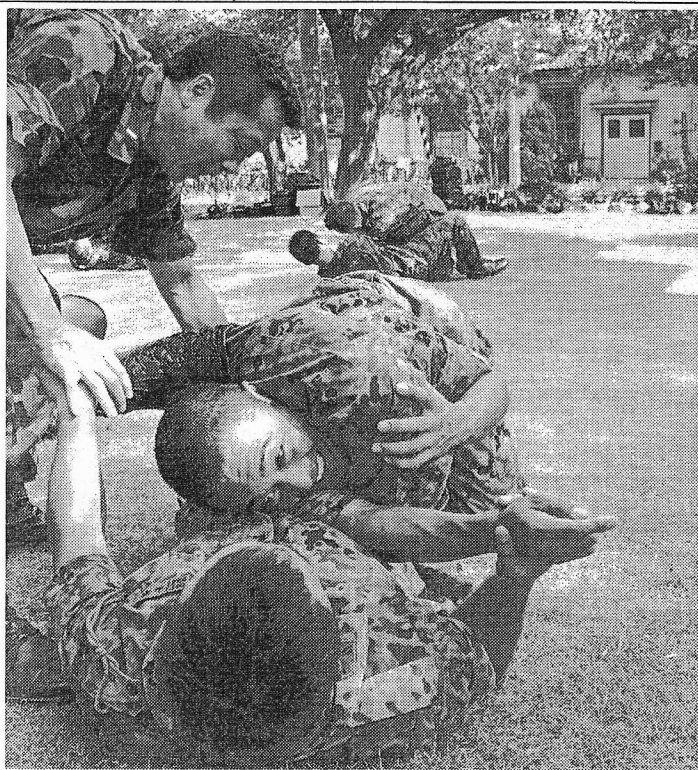
陸上自衛隊が、隊員教育として訓練している「徒手格闘」をより実戦的なものにしようと、見直しを進めている。背景には、本格的な着上陸侵攻の脅威が相対的に低下する一方、ゲリラや離島侵攻への対処で近接戦闘の重要性が高まったこと

徒手格闘

自衛隊より実戦的に ゲリラ撃退へ

などがある。どちらかとしを進め、平成20年の本格導入を目指している。8月下旬、第10師団司令部のある名古屋市の守ト、足首固め、三角絞の優秀成績者が、銃剣やうした高度な技は陸自の素手による新たな格闘訓練を受けた。指導にあたる

「徒手技術」とするほか、銃剣、短剣の武器を使用した格闘を「武器技術」とするなど新しい体系づくりを急いでいる。その一方で、10師団をモデルケースに教育方法を年末まで指導、その結果を受けて来年1年間で教本の見直しと教育訓練方法などを検討し、平成20年に導入実施する計画だ。



より実戦的な格闘の指導を受ける隊員ら＝名古屋市の守山駐屯地

ったのは、空手や銃剣道、日本拳法などの有段者がそろって自衛隊体育学校第一教育課武道班の指導官ら。陸自では不審船事案などで近接戦闘の可能性が高まったことを受け、平成12年度ごろから見直しているが、素手の方を前に変えた。第一教育課企画室で徒手格闘見直しのため「格闘研究プロジェクトチーム」の質的指揮をとる吉武辰明。2等陸佐は、「慣れない隊員は銃剣を持つ手首を切られる恐れがあるので見直した」と説明する。素手同士の格闘では上

は教えてこなかった。実際の格闘訓練で使っている防具の再検討もメーカーの協力や独自の創意工夫で進め、現行の一式重量5・2キ（価格8万円）を1・5キ（価格1万5000円）まで改善した。「K1などの格闘技に興味を持つ最近の若い隊員には、現行の陸自の徒手格闘は物足りない。より実戦的にする」という。格闘からなる徒手格闘を身につけてほしい」との狙いもある。（大塚智彦）